

日本野外教育学会第 21 回大会 企画委員会企画シンポジウム

野外教育学研究法

井村 仁¹⁾ 土方 圭²⁾ 松本 秀夫³⁾ 渡邊 仁¹⁾ 坂本 昭裕¹⁾

1. 「野外教育学研究法」発刊の趣旨

1.1. 学会として研究法の本を

私たちの学会は研究と実践が両輪となっている。学会としての書籍出版は今回が初めてであり、当初さまざまな構想があったが、まず研究法に特化した本を作るということになった。今回の出版経験が、次に繋がると良い。

1.2. 本書「野外教育研究法」の特色

本書の特徴は、単に研究法の解説や研究論文の例示に留まることなく、執筆した研究者自身が「私はこんなふうに考えてこの研究に取り組んだ」という具体的なこと（例えば着想に至った経緯や研究に対する考え方など）を記載したことである。このことが、研究法の理解と併せて今後の研究活動の支えになれば幸いである。

1.3. 野外教育の総合性を大切に

研究が高度化・専門化しても、「野外教育とは何か」という、野外教育学会が本来追究してきたものへの姿勢を大切にしたい。三代目会長の松下俱子先生が、本学会の 20 周年記念小冊子に寄せられた文章の中で「研究活動が進化した今、改めて多様な野外教育について考える場を学会に求めたい。」と語っている。野外教育の総合性を大切に、多様な研究のあり方を許容する学会でありたい。

1.4. 研究倫理を考える

野外教育の研究では、「(野外教育プログラムの) 参加者=研究協力者」という特質ゆえに、研究者の研究倫理が一層求められるであ

ろう。そのため、本書では冒頭に研究倫理に関する共通性の高い内容を一括し、研究法の各章ではその領域に特有の研究倫理について記載した。

1.5. データベース (ROP) について

最後に、出版・データベース委員会として、データベース (ROP) についても触れておきたい。ROP は、双方向性のデータベースを意図して作られた。ROP で論文内容を閲覧できると便利だが、著作権の問題があるため第三者が論文本文を公開することはできない。だからこそ、ぜひ論文著者の皆さんに ROP に直接関与していただきたい。今後、多くの人がこのデータベースを活用していくことがとても重要と思う。野外教育に関心のあるさまざまな分野の人々と研究内容を広く共有できるように、研究活動の充実と併せて、データベースの充実にも取り組んでいただきたい。

今日の分科会でさまざまな議論がなされることを期待し、今後に向けてのスタートとなることを願っている。

(出版・データベース委員会 井村 仁)

2. 分科会 1 歴史・哲学的研究法(文献研究)

司会進行：張本文昭(沖縄県立芸術大学)

話題提供：井村 仁(筑波大学)

小森伸一(東京学芸大学)

コーディネーター：土方圭(明治大学)

本分科会では、先ず、著書「野外教育研究法」を元に研究方法について確認が行われた。

1) 筑波大学

2) 明治大学

3) 東海大学

続いて、事前に参加者に提出をお願いしていた本著作への疑問点に執筆者が回答した。そして最後に、研究方法の確認に終始せず発展的な議論を行うための問題提起「歴史・哲学的研究方法が当該分野の発展に貢献していくためには」という論題について意見交換を行った。

2.1. 歴史・哲学的研究の方法について

2.1.1. 文献学的研究法について(小森伸一)

文献研究全般を概説していただき、論文の定義や要件といった基礎的内容について解説がなされた。

論文であるための前提としては「新たな知見が提示」されている必要があり、また、客観的な根拠に基づいた論理的な議論を行っているという要件を満たす必要があることが確認された。

また、海外では厳密に行われるが我が国(特に人文科学分野)で見落とされがちな、研究の認識論ならびに方法論的立場を明らかにすることの重要性について説明がなされた。

2.1.2. 歴史学的研究法について(井村仁)

先ず、歴史学的研究(方法)について概説していただき、この研究アプローチでは、文献研究に限らず、例えば道具や用具そのものや関係者のオーラルヒストリーなども資料として分析の対象とすることについて言及された。これらを例とした「歴史」への様々な接近方法についての説明がなされた。

加えて、歴史学的研究を実施していく上で重要なこととして、過去の事象を明らかにすることのみならず現在の課題解決へとつながること、事象の背景と時系列変化を縦と横でしっかり押さえ編み込むことの重要性について指摘がなされた。

また、年表を作成し掲載することは労力がかかるが非常に重要であると述べ、丁寧な検証がなされることが社会の発展のためには大切であると付け加えられた。

2.1.3. 哲学的研究法について(土方圭)

哲学的研究方法については、先ず哲学的研究の方法に言及した解説書の少なさについて触れ、この点は哲学的方法による研究の乏しさにも関係しているのではないかとの指摘がなされた。

また、今回の方法に関する執筆にあたり「哲学とは何か」を問いの端緒としたことに触れ、これにより哲学とは「問う」運動であり、研究者の関心に相関して対象が決定され、方法はそれに即して選択されることが指摘された。これは方法の型がないということであると説明がなされた。

しかし、方法が問題に則して創出されることが基本とはいえ、主張の論理的妥当性を担保する努力が欠かせないとし、これには論理学の知見が重要な役割を果たしていることが付言された。

2.2. 事前質問の紹介・応答

ここでは、分科会参加者が抱いた本著作への疑問等に執筆者が回答するかたちで意見交換が行われた。

2.2.1. 当該研究方法を用いた研究がなぜ少ないか?

井村：少しずつ積み上げていく作業が大変だからだと思う。

土方：方法に関する資料が少なく、取り組みたいと思っても敷居が高く感じられ、大変だからではないか。

小森：現代社会は数学的世界観(数値化)に偏向しており、前後関係を考えて、筋道をつけて論じていくことを難しく感じるのではないか。

2.2.2. 研究成果と実践のつながりは?

土方：ある概念の登場や解釈の変更により指導法が変わる等のインパクトがある。

井村：信念の強化および刷新につながる。

小森：研究成果により我々の実践を支えている物事の見方(世界観)が変更される。

2.3. 歴史/哲学的研究(方法)が今後果たすべきこと

2.3.1. 歴史/哲学的研究法と野外教育学の体系化

歴史・哲学的研究方法が今後取り組むべき課題として、コーディネーターより「野外教育学の体系化」という問題が提起された。

その理由として、学会設立趣意書には「学術団体としてのアカデミズムの追及」があり、その一環として野外教育学の体系構築を試みる必要があるのではないかとの説明がなされた。

2.3.2. 野外教育学の体系化に関する議論

1) 体系化の前提となる「定義」について

○教育史研究では、現在における定義を決めないと過去にさかのぼれない。例えば、野外教育の源流はここにあると言いたいときに、現在における野外教育の定義がはっきりしていないと言えない。逆に、(定義しないで) 野外という言葉にこだわって、拾っていくという方法も可能である。

○2011年の学会テーマは「野外教育の体系化」であったが、野外教育とは何かを定義づけなくてもよいのではないかという議論もあった。定義すると、それに含まれないものを決めることになってしまうので、今はまだよいのではないか。今回の野外教育学研究法の発刊が2011年以降の体系化の第一歩だと思う。

○範囲を切り取るような定義がある一方で、野外教育という曖昧なものの中にある確たる軸が定義であるという見方もある。「軸」と「外枠」が考慮されるべきでは。

○「自然・人・体験」で十分なのではないか。

以上は議論の中の一部であるが、体系化につながる「定義」の在り方についての意見交換が活発になされた。

2) 野外教育の体系化について

○林学では、かなり昔から学問として体系化されていた。しかし、昔はなかった問題(温暖化と森林の関係等)が論じられる現在は、その体系もあやしくなっている。変わって

いくという前提のなかで議論していく必要があるのではないか。

○野外教育とは領域であり学問体系を構築する必要はないのではないか。当該領域での活動について様々な(体系を有する)学問からアプローチすればよいのではないか。

○体系がないと教育ができないのではないか。

○野外教育学会の人は「野外教育性善説」に立っている。自然、人、体験といったときに、行為の方向、変化の方向を問う必要がある。「これは違うよね」ということを考えていくと、自覚的になれるのではないか。

以上の意見に代表されるような活発な議論が行われた。

2.4. 分科会まとめ

野外教育学の体系化について、その実施の是非についてはさておき、今回の分科会では現在まであまりなされてこなかった議論が展開されたように感じる。このような機会の継続的な創出が重要であろう。

最後に、登壇者のコメントを掲載する。

井村：こういう議論を継続するための装置が必要なのではないか。

小森：対話し続けていくことが大切なのではないか。文献研究法とはそういうことではないだろうか。

土方：自分の主張(風土)はたたき台。批判的に検討していただいて活発な議論が起こることを願っている。

張本：提案として①学会としてプロジェクトを立ち上げる。②自主企画シンポジウムを実施する。

(コーディネーター 土方 圭)

3. 分科会2 調査研究法

演者 松本秀夫(東海大学)

演者 白木賢信(常葉大学)

コーディネーター 松本秀夫(東海大学)

本分科会においては、まず、フロアの参加者について、自己紹介と「この分科会になぜ

参加したのか」を話してもらい、参加者の求めるものを把握した。多くの参加者は、自ら行って来た（行おうとする）量的調査研究に対する疑問や新たな情報と知識を得ることを期待していたと感じた。このような状況で、「調査研究法を用いた研究」について概説を行った後、実際の研究事例を踏まえて調査における「関係把握の可能性と限界」について解説した。その後に質疑応答を行った。

3.1 調査研究法を用いた研究（松本秀夫）

3.1.1 調査研究法の意義

調査研究には、質的調査研究と量的調査研究があり、それぞれに特徴がある。野外教育の分野においては、学校教育や社会教育において行われている様々な活動が対象となる。調査協力者が少数である質的調査研究や評価尺度を用いた量的調査研究が縦断研究、横断研究として行われている。重要な点は、少数の調査協力者による事例・観察による質的調査研究と量的調査研究の融合であり、仮説生成と仮説検証について、それぞれの調査研究の特徴を活かし、効果的な「質」と「量」の研究実施から新たな課題を探求することである。

3.1.2 検査・評価尺度の作成

検査・評価尺度については、「論理的妥当性を踏まえた項目の抽出」「有効な項目の客観的選択」「評価尺度の信頼性・妥当性」の観点から、探索的因子分析、確認的因子分析による作成プロセスについて解説をおこなった。特に項目の因子負荷量に基づく収束的妥当性と因子間の弁別性が重要であり、Two-Step アプローチによる従属変数を含めた確認的因子分析が求められる。従属変数と独立変数の弁別性が認められなければ、従属変数と独立変数は同じ概念であることが否定できず、その後の因果関係の分析を行うことはできないということになる。

3.1.3 新たな調査の方法

新たな調査研究法として「インターネット

調査」「既存データの2次利用」がある。

インターネット調査は、2つのタイプがある。1つは調査票をインターネット上に作成して、調査協力者をeメールやSNSなどによって募る方法である。2つ目は調査協力者を調査会社の登録者やクラウドソーシングサービスなどによって募る方法である。前者には報酬がない場合が多く、後者はポイントや謝金が協力者に付加される。アメリカのAmazon Mechanical Turkの実際例について解説を行った。また、これらの調査の信頼性に関する論文を紹介した。

3.1.4 調査実施上の問題

調査実施においての問題点については「サンプリング」「研究倫理」「統計解析」を取り上げた。

サンプリングについては、個人情報保護の観点から住民基本台帳の使用が制限されたこともあり、母集団からの無作為抽出が困難な場合が多く、確率法を用いることは困難であり、バイアスの可能性はあるが簡便法を用いるのが現実的である。

研究倫理については、プライバシーの保護と研究参加の同意を得ることが重要であり、特に18歳未満の児童・生徒を対象にする場合や知的障害、精神障害がある場合の配慮が課題となる。また、データの管理も同様であり、大学・研究機関における倫理審査が不可欠である。

統計解析について、野外教育分野の研究におけるサンプルサイズが小さいことが多いことから、研究の限界を把握し研究に適した統計解析を選択することが求められる。また、サンプルサイズに影響を受ける有意確率 p の誤用を避けることが重要であり、 p 値が効果の大きさや結果の重要性を意味していないことを十分理解する必要がある。今後は、サンプルサイズの小さい野外教育分野の研究においても p 値に頼らないベイズ統計を用いる時代が来ることも視野に入れるべきであろう。

3.2 調査研究による関係把握の可能性と 限界（白木賢信）

3.2.1 関係把握の前提

関係とは物事（ものやできごと）の間のかかわりのことで、物事があれば関係は存在する。しかし、関係は目に見えることはできない。そして、関係の存在が分かるのは、まず物事を捉えその間にかかわりがあることが認められたときである。従って、関係は直接把握することはできず、物事の表出を通して間接的に把握するしかない。一方、関数とは、定義域 D^* 、値域 R^* 、そして定義域 D^* の各要素に値域 R^* の対応する要素を、順序対（その 1 つを第 1 の成分、他を第 2 の成分と指定した対象の組）をつくるように結びつける特定の指示に関するものである（例えば、 $y=f(x)$ の場合、独立変数 x が取り得る値の全体（変域）を当該関数の"定義域"と呼び、独立変数 x が定義域のあらゆる値を取るときに従属変数 y が取り得る値（変域）を当該関数の"値域"と呼ぶ）。

これら関係と関数の違いは、全ての関数は関係であるが、全ての関係が関数ではないということである。

3.2.2 調査研究による関係把握の可能性

自然体験活動遂行と自然体験蓄積の場合、共に"物事"の 1 種である「自然体験活動遂行（自然体験活動を一連の活動として最後まで実行すること）」と「自然体験蓄積（自然体験を重ね蓄えること、またはその内容）」を通して、両者の"関係"を関数として間接的に把握できる可能性がある。そして、自然体験活動遂行と自然体験蓄積の関係把握においては、両者の変数間の関係は、因果、関連、回帰、相関などが挙げられる。

3.2.3 関数による関係把握の限界

調査研究上の限界としては、特に調査研究にあっては、相関（関係）と因果（関係）の間に次の問題が存在する。調査データから例えば A と B の相関関係の有無やその程度を把

握することができたとしても、そこから因果関係を確定する際、少なくとも① $A \rightarrow B$ ② $B \rightarrow A$ ③ $A \rightleftharpoons B$ ④ $A \leftarrow t \rightarrow B$ の 4 種類が想定され、そのいずれかを確定するためには、一部は思考により解決されるとしても、厳密には実験等に頼らざるを得ない。自然体験活動遂行と自然体験蓄積の関係にあっても、相関関係を把握することができたとしても因果関係を把握することまでは困難であると考えられる。さらに、時間的な順序性も持たないことから回帰関係とも考えにくく、双方向の関係として捉えられる。

その上で関数による関係把握の限界を検討してみると、関数がこれまで科学的説明や予測に大きな貢献をしてきているものの、関係の全てを関数で把握することまではできない。関数で把握できない関係については、さまざまな観点からの関係把握の試みがあるものの（山本恒夫（1978）、Edgar Morin（1980）、藤原等（1998）など）、殆どは記述するだけに止まり、これらの関係にかかわる問題解明にあつての障害となっている。

3.3 質疑応答と補足

ここでは、統計解析とデータの 2 次利用に付いてが話題となった。体育・スポーツにおいては、まだまだ、従来の統計解析が主流であり、今後、有意確率 p 値に頼らない統計がどの程度用いられるようになるのかということが取り上げられた。実際には、構造方程式モデリングにおける間接効果の検定においても 95%信頼区間の幅が用いられていることや、2 群間の比較においてオッズ比が用いられていることなどが回答された。また、サンプルサイズに影響される p 値のみでなく、多くのケースで効果量が要求されていることが示された。

データの 2 次利用については国立青少年機構がデータを公開していることが補足された。利用されたデータによる論文も紹介され、今後の更なる利用が期待される。

最後に、参加者の期待に沿える内容であったかは難しい。しかし、手軽に行えるが、それを正しく行うことに細心の注意を払う必要があるのが「調査研究」であることを再認識させられた分科会であった。

(コーディネーター 松本 秀夫)

4. 分科会 3 実験的研究法

話題提供者：國部雅大（筑波大学）

中垣浩平（山梨学院大学）

指定討論者：伊原久美子（大阪体育大学）

東山昌央（山梨学院大学）

コーディネーター：渡邊仁（筑波大学）

本分科会では、「野外教育研究法」を元に、実験的研究の方法論としての基礎を概説した。その後、実験的研究を多く手がける國部先生（スポーツ心理学）と中垣先生（体力学）から話題提供をしていただき、野外教育を対象に実験的研究法を用いることの意義や課題等について議論を深めた。

4.1. 野外教育学研究法ダイジェスト+α

4.1.1. 実験的研究法とは何か（渡邊仁）

実験的研究法では、ある仮説を検証するために、あらかじめ計画された手続きに基づいてデータの収集や分析を行う（仮説検証）。その際、一般的には、独立変数や従属変数を設定する。（なお、基本的な要件等は、野外教育研究法を参照）

野外教育の実験的研究を遂行する上で、よく議論される問題を列挙すると、①「標本抽出（無作為抽出 vs 有意抽出）」の問題で、無作為抽出への工夫の追求とともに、有意抽出の優位性を論理的に説明する努力が必要かと思われる。また、②「独立変数の曖昧さと統制の困難さ」については、複合・媒介的な独立変数「キャンプ」をどう位置づけ、交絡変数をどのように見定めるかが難しい。それ以外にも、③統制群の妥当性、④効果の持続性、⑤再現性の保証、⑥実験者の独立性などが、よく議論の俎上に挙げられる。

今後の課題としては、野外教育推進のためにも地道な研究蓄積の必要性、共通指標の他領域との比較可能性、実践者と研究者のマッチングシステムの構築、現場への活かし方等などがあり、一層のアイデアと努力が必要と感じている。

4.1.2. 心理的な指標研究の課題（伊原久美子）

私が、2013年に発表した論文を土台に、その過程において見出された課題等をいくつか挙げる。

まず、実験群と統制群の設定について、統制群のサンプル選定を「実験群（参加者）の友達」としたが、その妥当性についてである。また、「キャンプ」という独立変数が十分にコントロールできるかという問題である。例えば、キャンプへの「自主参加」であるか「強制参加」であるかにおいても違いが生じるし、期間をあけての複数事業の場合、「キャンプ以外の時間（体験）」の統制は難しいと考える。

それ以外の問題点は、事前の値が実験群と統制群で著しく異なる場合、その解釈や統計的処置はどうすべきか。また、キャンプ実施数ヶ月後に同一調査を行う際に、それまでの日常体験からの影響をどう捉えればよいか。さらには、そもそもキャンプは、どのように再現性が保証されるべきだろうかといった問題である。

4.1.3. 身体的な指標研究の課題（東山昌央）

過去の発表研究の着想は、教育キャンプ中の身体活動の多様性の驚きから、「心身両面」から活動の意味を捉える必要性を感じた。同時に、体力・運動能力向上のためだけに、教育キャンプが行われているわけではないことから、これを捉える難しさも感じていた。

そんな時、他領域の研究者との対話の中で、教育キャンプは、生活行動で十分な活動量が確保されており、健康な生活の実践のあり方として特徴的であると感じた。また、体を動かすことを厭わない子どもの育成、つまり運動好きへと導くきっかけとして、キャンプと

いう「場」は貢献できるのではと感じた。そして、「共通言語 (=標準化された指標)」でその特徴を説明したい思いに至った。

今後の研究の可能性を考えると、研究の目的や位置付けを整理する全体図が必要と感じている。例えば、①野外教育の特性に関する研究(内向き)、②野外教育の価値を発信する研究(外向き)である。また、「野外教育の実践知」「専門的な分析手法」「着想」「俯瞰視」を得るためにも、他領域の研究者との協働が重要と考えている。

4.2. 実験的研究の他領域専門家からの視座

4.2.1. 体力学領域の研究視点(中垣浩平)

私のこれまでの研究は、カヌースプリントを対象に、「その競技パフォーマンス向上」を目的(最終的ゴール)として行なってきた。

研究のアウトラインは、「ゴール(目的)」をどのように達成するかを検討しなくてはならない。実際、競技パフォーマンスに関与する要因(体力的要因内・外)は多数あるが、エネルギーの流れを一つのkey(軸)として検討することにした。具体的な検討課題として、①推進に寄与する仕事、②推進効率、③選手が発揮すべき外的仕事とエネルギー系の体力の関係、を挙げて目的の達成に迫った。現在は、カヌースプリント研究は一区切りして、「目標となる体力水準に達するためのトレーニング方法・手段」について、自律神経活動に着目してトレーニング応答の個人差を検討している。

さて、研究において重要な視点は、「最終的な『ゴール』は何か」、そして「それを達成するための『軸』は何か」という点である。前者は分野に関係なく重要であり、後者は分野ごとに異なるであろう。翻って、野外教育研究の難しさは、私見として、「最終ゴール」も「軸」も非常に多種多様であり、今一度専門家の皆さんによる整理が必要ではないかと感じる。

4.2.2. スポーツ心理学領域からの実験的研究の実際とポイント(國部雅大)

私の研究テーマは、どうすれば運動がうまくなるのか(運動学習/運動制御に関する実験心理学的アプローチ)などで、「反応時間」「両眼眼球運動」「簡単な動作分析」を主な研究手法にしている。

さて、心理学概論(京都大学心理学連合編、2011)では、「実験法とは本来、観察法から派生した探求の方法のひとつ」であり、①自然実験、②野外実験、③実験室実験、④シミュレーション実験、の4タイプがあると説明されている。野外教育の研究は、①~③が範疇になると思われる。「実験室」を用いる理由は、条件統制等が容易であり、交絡変数の混入を防ぎやすいというメリットがあるからである。しかし、実際のところ、実験準備をじっくり行えるフィールド(野外)を身近に見つけるのが大変であるという理由(本音)も個人的にはある。野外実験の環境を整えている「野外教育の専門家」は、実験研究を行えるフィールドが身近にあることを強みと捉えられるのではないかと感じている。

次に、実験におけるサンプル数の問題ですが、「量的研究」は、必ずしも「大量の人のデータ」を必要とはしない。例えば、ひとりを対象にした量的研究(単一事例実験)は、2つのフェーズ(Baselineと介入期)を設けて、それぞれ複数の時点で変数を測定することで、データ数を確保する(ABABデザイン)。また、野外での実験を難しくしている交絡要因があるが、ICC(Intra-class correlation: 級内相関係数)の導入が有効かと思う。

最後に、対象をよく観察していくという姿勢は、どの研究アプローチにも共通している。また、あらゆる(実験)研究には、弱点があります。それぞれのアプローチの弱点を認識したうえで、互いに補完し合いながら研究対象に迫る姿勢が大切と思う。

4.3. 分科会を終えて（総括）

「研究法」執筆をした伊原氏と東山氏は、本書のダイジェストから執筆の際に触れられなかった点、あるいは執筆過程で整理された見解などをお話くださった。また、実験的研究に造詣の深い中垣氏と國部氏からは、大所高所からの貴重なアドバイスに留まらず、トレンドの方法論の紹介等もしてくださった。

フロアーとのディスカッションでは、詳細な方法論への質問から、実際に「野外教育の実験的研究」の難しさを理解・整理が会員間で共有できたことが有益と感じた。課題は山積しているが、濃霧から、「山頂」形状や「谷や尾根筋」の地形がうっすらと見え隠れしてきた感じである。個人のアイデアと努力の積み重ね、そして研究者同士の協働で、少しずつ前進していける気がしている。

（コーディネーター 渡邊仁）

5. 分科会 4 事例研究

司会進行 : 杉岡品子（北翔大学）

話題提供 : 坂本昭裕（筑波大学）

吉松 梓（新潟医療福祉大学）

寺中祥吾（流通経済大学）

杉岡品子（北翔大学）

事例研究—野外教育における実践知の創出—

5.1. 野外教育における事例研究の考え方

野外教育における事例研究は、実践において指導者（キャンプカウンセラー）が、自分の担当した参加者（キャンパー）について、そのカウンセリングあるいは、指導の経過を詳細に記述し、そこから実践における重要な知見（実践知）を導き出すことを目的としている。この導き出された実践知は、1）参加者の個別な体験世界の理解、2）参加者のキャンプ体験の意味の理解、3）実践の改善、カウンセラーのトレーニングなどに役立つ。事例研究の意義は、実践者自身（研究者）やその事例を聴いたり、読んだりする人の実践力を高めることにつながるということである。

事例研究における研究パラダイムは、自然科学の研究パラダイムである普遍性、論理性、客観性とは異なっており固有性、多義性、主観性が重視される。事例研究は、質的研究との相性がよく、データ収集や分析には様々な方法の適用が可能である。したがって、事例研究は、研究方法というよりは、1つの事例に対するアプローチと考えた方がよい。事例研究における実践知の一般化可能性（普遍性）は、自然科学における普遍性と異なり、間主観的普遍性と呼ばれている。この間主観的普遍性が、指導者を含めた実践に関わる人に質的な改善をもたらす。すなわち、事例研究によって見出される「知」の一般化可能性の本質は、類似した状況において個別の人間によって応用される「転用可能性（transferability）」にある。

5.2. 事例研究の実際から

5.2.1. グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた事例研究

事例研究の実際として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いた研究「不登校児は長期冒険キャンプ後どのように社会へ適応していくのか」を紹介する。データ分析は、①テキストデータの作成、②分析テーマと分析焦点者の確認、③分析ワークシートを用いた概念（コード）の作成、④カテゴリーの作成、⑤結果図の作成、⑥ストーリーラインの作成の順序で実施する。特に、①のテキストデータを読み込んだ後、②の分析テーマの設定による研究テーマの絞り込みをしっかりとすることが、その後の概念生成や結果の抽象度に影響するため重要である。また、論文掲載時には、結果図だけではなくその根拠となる資料（分析ワークシートやカテゴリー・概念・具体例の一覧表など）を示すこと、具体例（発話データ）を交えて説明することが、読者の間主観的理解を可能にするために必要である。

M-GTAの研究を行った経験から次の3つ

の所感を述べておきたい。1つ目は、継続的比較分析という手法上の特徴により、研究過程は試行錯誤の繰り返しによる地道な作業であるが、仮説の道筋が見えてきた時には喜びがある。2つ目は、データから深い解釈を行うためには、研究者の力（実践経験、研究経験など）が重要である。3つ目は、独りよがりな解釈とならないように、スーパービジョンや仲間報告など、研究の信頼性を担保する手続きが欠かせないを考える。

5.2.2. グループを対象にした事例研究

グループを対象にした研究の実際として、「長期冒険キャンプにおけるグループプロセスの検討」について、質的データの収集と分析を中心に紹介する。本研究では、調査と分析のプロセスとして、①参加観察によるデータの収集、②記述データを編集しグループごとの事例を生成、③3つの事例を統合しグループプロセスモデルを生成、という手順を辿った。研究の信憑性（量的研究における妥当性）を高めるために、①においては複数の参加観察者の視点の共有と相互レビューによって参加観察の方法や視点の精度をあげることで、②③においてはその都度グループスーパービジョンを通じた専門家からのスーパーバイズや研究者同士のレビューを受けデータの恣意的な解釈を避けることが重要である。

本研究における試行錯誤や反省を踏まえ、3点の課題が指摘できる。(1)研究方法のトライアングレーション；量的調査と質的調査を組み合わせた研究を行ったが、方法は目的によって決まるため、つねに研究の目的を参照・変更しながら複数の方法やデータを扱っていくことが重要である。(2)研究者のトライアングレーション；複数の研究者が関わることはとても重要なのだが、研究者自身もそのさしになるという質的研究の特性から、研究者の経験や能力によってはデータを精緻に積み上げることを阻害する可能性を感じた。(3)本研究の分析過程において、事例から理論

(モデル)へのプロセスが不明瞭であった。質的研究の「確実性」(量的研究における信頼性)を高めるうえで、そのプロセスの詳細な提示が重要である。

5.3. 事例研究の要点

最後に、「良い事例研究を行うための要点」について述べる。ポイントは4点である。1つ目は、「歪みをなくすこと」である。ここで言う「歪み」とは事実と異なるという意味である。これは、自分自身が立脚する理論等に都合の良いデータのみを扱うことから発生する。データには都合の悪い、あるいは矛盾すると思われるものが含まれるが、研究テーマに沿っているものであれば、それを切り捨てたりせずに丁寧にみていくことが重要である。そうすることで、研究は事実そのものから成立したものとなる。2つ目は、「偏りをなくすこと」である。これは、分析・解釈において自分自身の強い思い込みから発生する。分析・解釈は多角的な視点から行い、時には「本当にそうなのか？」と疑ってかかる勇気も必要である。そして、様々な理論を学ぶことや、仲間報告や監査を行うことが大切である。3つ目は、「手間ひまを惜しまない」ことである。事例研究は、データ量も多く、分析や記述には時間を要する。しかし、手間ひまを惜しまず、十分な状況の描写をすることが重要である。つまり、解釈の根拠を事例の中から明示し(データに基づいている)、解釈を導き出すためのプロセスを十分に記述する(道のをりを通れる)ことである。そして、これらから研究の転用可能性、確実性を保証することにつながる。4つ目は、「評価を恐れない」ことである。評価を受けることは、緊張や不安が高まるものである。しかし、研究仲間の評価(仲間報告)、対象者による確認(メンバーチェック)、第三者による点検(監査)は、良い事例研究に繋がるものである。

5.4. 討議

Q. 社会調査で一般化したことを一人ひと

りの子どもに当てはめようとした時に難しさを感じることもある。指導者として関わりながら調査も行っていく上で、客観性をどのように担保したらいいのか。

A. 調査から導き出された理論は、ある一人の子どもに当てはめることには慎重に行われるべきと思われる。事例研究では、ある意味、子ども一人ひとりが理論とも言える。したがって、子どもの事例をグループで検討し、その理論との類似点や相違点について客観性を得るようにすべきであろう。

Q. 解釈を導き出すプロセスを十分に記述するということが難しいのですが。

A. 具体例は力を持っている。限られた紙面の中でも重要な具体例を出すことで、確かにこういう語りはこう解釈できる、という理解につながる。具体例から考えることが重要である。

A. もやもやして表現できなかったことを、映画や本など日常の中に見つけてメモしている。データを解釈するときに、自分の中のひらめきにつながることもある。

A. 解釈をしていくときの基本は、まず、観察や面接に基づく主観的な判断を入れない一次記述をしっかりとすることが大切である。頭の良すぎる人は、一次記述を読み込む前に解釈してしまう（はやわかり）。そして次に、観察者あるいは面接者の判断（解釈）を含めた二次的な記述をする。

（コーディネーター 坂本昭裕）